

中国語を母語とする上級日本語学習者が 学術論文を読むときの困難点

—名詞の意味の誤った理解を中心に—

藤原未雪

◆要旨

中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの読解過程を調査した。そこでの名詞の意味の誤った理解に焦点をあて、論文読解時に生じる誤読について考察した。

調査の結果、名詞の意味の誤った理解について次のような6類型が見出された。(a) 固有名詞を普通名詞と取り違える、(b) 複合名詞の全体的な意味が合成できない、(c) 多義的なカタカナ語で文脈に合わない意味を選ぶ、(d) 音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える、(e) 漢語の略語の意味を誤って解釈する、(f) 照応関係が把握できない。

上記の考察から、読解教育では次のような指導が望まれる。(g) 辞書や翻訳アプリなどのリソースの特性と使い方、(h) 固有名詞か普通名詞かを判別する方法、(i) 多義的なカタカナ語の意味を特定する方法。

◆キーワード

上級日本語学習者、学術論文、読解、困難点、名詞

◆ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate how advanced Japanese learners of Chinese native speakers interpret the meanings of the texts incorrectly when reading academic papers, focusing on misunderstanding nouns.

The result showed that there were the following six types of the misunderstandings of nouns: (a) mistaking proper nouns for common nouns, (b) being not able to synthesize the overall meaning of compound nouns, (c) choosing non-contextualized meaning of ambiguous *Katakana* words, (d) mistaking *Katakana* words for another words due to the similarities of their sound patterns (e) interpreting the meanings of abbreviated Sino-Japanese words incorrectly; (f) failing to grasp an anaphoric relation in the texts.

By considering the above observations, this paper suggests that the following points should be taught when teaching reading comprehension: (g) characteristics of dictionaries and smartphone applications for translation, and proper ways of using them, (h) the ways of distinguishing proper nouns from common nouns, (i) the ways of determining the meanings of ambiguous *Katakana* words.

◆KEY WORDS

advanced Japanese learners, academic papers, reading comprehension, difficulties, nouns

Difficulties in Reading Academic Papers
for Advanced Japanese Learners of
Chinese Native Speakers
Focusing on the misunderstanding nouns
MIYUKI FUJIWARA

1 研究の目的

日本の大学院で研究する上級日本語学習者が、日本語で書かれた専門分野の学術論文を読むとき、不適切な理解にいたる箇所は多い。一方、中国語を母語とする学習者の場合、単語の意味を理解するにあたって、漢字の知識が参照され、それが読解の助けになることも事実である。学習者自身からも日本語の読解はあまり難しくないという話をよく聞く。では、実際のところ、学習者はどのように論文の内容を理解しているのだろうか。

野田(2014)は、上級学習者に読解過程を話してもらうだけでなく、質問にも答えてもらう調査を日本語で行った。そして、学術論文を読むときに、語句の意味の不適切な推測、文の構造の不適切な捉え方、既有知識に基づく不適切な理解をすることを明らかにした。しかし、上級学習者による学術論文の読解過程については研究自体がまだ少なく、わからないことが多い。読解にあたってどのような知識やストラテジーが利用され、情報を読みとる上でどのような困難点があるかを具体的に知るには、学習者に日本語で書かれた論文を実際に読んでもらい、その過程を観察する必要がある。

本稿では、上級学習者が学術論文を読むときの、名詞の誤った理解に焦点をあて、論文読解時に生じる誤読について考察する。調査では実際に名詞の誤った理解が多く見られ、テキストの解釈に重要な役割を担う名詞を誤読することが、全体の解釈に大きな影響を与えられ考えられるからである。

研究方法として次の手順に従う。読解中の学習者の発話だけでなく、辞書などで語句の意味をどのように調べ、どのように理解するかをあわせて分析し、誤った理解にいたる過程を明らかにする。

ここでは、日本の大学院に在籍する上級学習者の多くを占める、中国語を母語とする学習者を調査対象とする。彼らは日本語を学ぶ以前から漢字の知識があり、中国語以外を母語とする学習者とは文字を通して利用できる知識が異なるはずである。両者を区別して調査するのはこのためである。

2 調査方法

上級日本語学習者が学術論文の内容をどのように理解したかについて、次の(1)から(5)の方法で調査を行った。

- (1) 調査協力者に研究上必要な学術論文を選んでもらう。
- (2) 普段どおりに辞書やパソコンを使って論文を黙読し、読みながら考えたことや理解できないところなどを調査協力者の母語で話してもらう。
- (3) 調査協力者に内容理解を確認する質問を行う。必要に応じて、専門分野についての既有知識の有無などを確認する。
- (4) 上述の調査協力者の発話と調査者とのやりとりについては中国語の通訳者を依頼し、同時通訳に近い形で通訳してもらう。それらをすべてICレコーダーで録音し、調査終了後に文字化する。
- (5) 辞書やパソコンを使ってどのように調べ、どのような意味が出てきたかについて、メモまたは写真をとって記録する。

調査協力者は日本の大学に在籍する大学院生11名である。全員、日本語能力試験N1を取得しており、中国語が母語である。

調査協力者が選んだ論文は7つの分野にわたる。人文地理学、経済学、経営学、社会学、心理学、教育学、観光学である。詳細は表1のとおりで、そこに示す論文番号は後述の例文に対応する。調査は2014年6月から2015年9月にかけて行った。

表1 調査で使用した論文

論文番号	論文名	分野
1	香川勝俊「小都市における大型点立地の地域商業への影響」『人文地理』39-3,1987	人文地理学
2	山形与志樹・水田秀行「京都議定書・国際排出量取引のエージェントベースシミュレーション」『オペレーションズ・リサーチ』10,2001	経済学

3	森谷智子・青木圭介「サブプライム危機と金融規制」『嘉悦大学研究論集』54-2,2012	経済学
4	下村博史「共同物流事業の成長メカニズム」『日本物流学会誌』15,2007	経営学
5	森健・白田佳子「企業と銀行の距離はリレーションシップを説明するか」『年報経営分析研究』26,2010	経営学
6	小松史朗「トヨタ生産方式と改善—能力形成と「参画」の過程—」『日本経営学会誌』18,2006	経営学
7	丸山雅祥・山下悠「フランチャイズ方式による海外進出：実証研究の展望」『国民経済雑誌』205-2,2012	経営学
8	松野良一「インターネットが「視聴者⇒テレビ」のフィードバック過程に及ぼしている影響についての一考察—TBSのWEBサイトの機能分析を中心として」『マス・コミュニケーション研究』61,2002	社会学
9	池田文人「錯視とその情報処理モデル」『情報処理』50-1,2009	心理学
10	丸山英樹「ユネスコスクール・ネットワークに見られる持続可能性：パルト海プロジェクトと大阪ASPnetを事例に」『国立教育政策研究所紀要』143,2014	教育学
11	山崎良夫「スポーツツーリズムと旅行ビジネス：旅行産業におけるスポーツツーリズムの可能性」『日本国際観光学会論文集』21,2014	観光学

3 先行研究

日本語学習者の読解については、様々な観点から研究が行われてきた。読解過程の研究には館岡（1996）や谷口（1991）などがある。それぞれ、学習者に要約文を書いてもらったり、話してもらったりして、その読解過程を分析している。一方、専門日本語の読解研究には深尾（1994）や山本（1995）などがあり、独自の語彙や複雑な構文などが読解の障害になることが指摘されている。

しかし、上述の読解過程の研究では、調査に使用された文章は調査者が与えたものであり、学習者の興味とは関係がない。これでは現実の読解活動を反映しているとは言えないだろう。また、学習者が読んでいるその場で、そのように理解した理由を聞いてはじめて、学習者の読解過程を詳しく知ることができるが、従来の研究ではそのような方法が採られていない。一方、上述の専門日本語の読解研究では、学習者の読解過程については言及がない。また、野田

（2014）は意味の理解を正確に知るためには母語を使った調査が必要だと述べている。

これらの先行研究と比較すると、本研究は次の（6）から（8）のような点に特色がある。

- （6） 上級日本語学習者に読む必要がある専門分野の論文を読んでもらう。
- （7） 読解過程を話してもらっただけではなく、質問にも応えてもらう。
- （8） 日本語ではなく、学習者の母語により内省を語ってもらう。

4 名詞の意味の誤った理解

調査では、文構造の捉え方の誤りなど、様々な読解困難点が見られる。ここでは、名詞の意味を誤って理解することに焦点を絞る。内容語である名詞の意味を誤って理解することは、その単語を含む文の意味も誤ることになり、テキスト全体の解釈を別の方向に導いてしまう。

最初に、名詞の意味を誤って理解する例について、その性質の違いから次の6類型に分けて述べる。①固有名詞を普通名詞と取り違える、②複合名詞を要素に分けて解釈し、全体の意味が合成できない、③多義的なカタカナ語で文脈に合わない意味を選ぶ、④音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える、⑤漢語の略語の意味を誤って解釈する、⑥照応関係が把握できない、である。各例を次の4.1から4.6で説明する。また、4.7では誤った推測から正しい理解に落ち着く例を紹介する。

4.1 固有名詞を普通名詞と取り違える

学習者は会社名や人名などの固有名詞を固有名詞と考えず、普通名詞と捉える傾向がある。こうして辞書で意味を調べ、記載された語釈から推測を始める。

次の（9）は、「プラネット物流」が会社名を示す固有名詞とは捉えられず、辞書に記載された語釈から、原著者が意図しない意味まで付加した例である。以下、もとの論文から引用する場合は“ ”を使うこととする。また、例文の

下線部は筆者によるものである。

- (9) 阿保は、日用品業界の共同物流を運営する「プラネット物流」を題材に深い考察を行っている。(経営学・論文番号4)

この例で“共同物流を運営する「プラネット物流」”とあることから、「プラネット物流」をその運営主体つまり会社名と考えるのが正しい。しかし、学習者は「プラネット物流」を共同物流の会社名と考えず、翻訳アプリ〈Google翻訳〉で「プラネット」の意味を調べ、「惑星」と理解し、「プラネット物流」の意味を次の(10)のように言う。

- (10) 「地球物流」つまり「地球全体が繋がるような(システムを持つ)物流」

さらに、後続の“経営資源を連結して新しいサービスを創造する”という部分を読み、「先程の私の予想と同じ。地球全体を連結するという意味」と話す。このように、(10)の誤った解釈から誤読をベースにした一貫性が強固に補強される。「プラネット」と次にあげる「国領」は固有名詞と普通名詞が1つの単語に共存する例だが、辞書に記載がある場合、固有名詞だと認識されにくい。

また、次の(11)も同様に前述の論文からの例である。「国領」が著者名とわからず、辞書で調べ、「中世における公領」と理解したため、「彼」＝「国領」の照応関係が理解されない。以下、もとの論文の一部を筆者が省略する場合は[……]を使う。

- (11) このことを国領は「プラットフォーム」という概念で説明している。
彼はプラットフォームを[……]と定義している。(経営学・論文番号4)

この例で“国領は[……]で説明している。彼は[……]と定義している”とある。つまり、「国領」が人名であり、先行研究の著者名と理解されなければいけない。しかし、学習者は「国領」の漢字からその意味を「国境」と推測し、その後〈Google翻訳〉で「国領」と入力したところ、中国語で「国領」と

いう単語がそのまま出てきた。学習者は意味を十分に確認できなかったため、インターネットで「国領」と入力したところ、「中世において諸国が支配した公領」という説明を見つける。そこから、最終的に「国領」の意味を次の(12)のように解釈する。

- (12) 国領：それぞれの国が支配している場所

「国領」が出てくる1ページ前で、(10)に示すように、「プラネット物流」という名詞を「地球全体が繋がるような物流」と解釈し、その話題の類似性から、「国領」を「国境」の類義語と理解したようだ。それで、学習者は「国領」を先行研究の著者名と受け取らない。(11)の2文目の“定義している”主体は誰かと調査者が確認したところ、この論文を書いた原著者の下村氏だと答え、2文目以降の内容はすべて下村氏の考えであると誤読する。この種の誤りは先行研究の記述を正確に読む必要がある学術論文の読解では致命的である。

以上、「プラネット」は述語相当の機能を持つ修飾要素「運営する」の情報が、また、「国領」は述語の情報が利用されないことでもたらされる誤読と言える。

4.2 複合名詞を要素に分けて解釈し、全体的な意味が合成できない

学習者は複合名詞の意味を、語の要素の組み合わせから解釈する傾向があり、全体的な意味を合成できない。

複合名詞の全体的な意味について、石井(2006)は「ひとまとまり的な意味」として説明する。複合名詞の意味には、複合語を構成する要素の組み合わせから無理なく引き出すことのできる「字面どおりの意味」と、組み合わせから引き出すことのできない「字面以上の意味」があり、後者は複合名詞の「ひとまとまり的(非分析的)な性質」だと言う。また、多くの複合語は、組み合わせの意味のみを表す臨時一語に由来するようなものと、ひとまとまりの意味のみを表す単純語に近いもの間にあると述べている。

次の(13)では、「キャリア・パス(carrier pass)」は「ある職位に就くのに必要な一連の業務経験」という全体的な意味があるが、語の要素の組み合わせから「キャリアを目の前で見送る」と解釈する。

(13) そして、肉体労働領域から精神労働領域へと拡大するキャリア・パスは、「分離」された構想と実行を限定的にはあるが「再統合」する可能性を持つ。
(経営学・論文番号6)

ほかに、「Web マスター」(経営学・論文番号8)は「ウェブサイトの管理者」という専門的な意味があるが、学習者は語の要素の組み合わせから「インターネットに詳しい人」と解釈する。また、「トップダウン」(経営学・論文番号6)は「組織の上層部が意思決定をし、その実行を下部組織に指示する管理方式」という意味だが、「会社で上位から下位まですべての人」と解釈する。

このように、語の要素の組み合わせの意味からたどり着けない複合名詞の全体的な意味は読解の困難点となりやすい。

4.3 多義的なカタカナ語(外来語)で文脈に合わない意味を選ぶ

「点火器(lighter)」と「作家(writer)」は日本語ではどちらも「ライター」と表記される。一方、「ソフトウェア」が「ソフト」と表記され、略語として語形が短くなれば多義性は増大する。学術用語はカタカナ表記の外来語で定着し、調査でを使用した学術論文にもカタカナ語が多用される。

次の(14)は、論文中のセクション表題に現れる「レコード」の意味がわからず、文脈に合わない別の意味に理解する例である。(14)の「日本レコードセンター」は論文中で(15)のように説明されている。

(14) 4.日本レコードセンターの成長過程

(15) 音楽CDやDVDなどの音楽ソフトウェアメーカーの共同出資によって設立された共同物流の運営会社
(経営学・論文番号4)

学習者はまず、翻訳アプリ〈Google翻訳〉で「レコードセンター」を調べ、「記録センター」という対訳を見るが、この意味ではないと考えた。次に、インターネットのgoogleの検索窓に「レコードセンターとは」と入力したところ、Microsoftの「レコードセンター」の説明が出てきた。そこには、「法的文書など、組織のすべてのレコードを格納、管理できる集中レポジトリとして機能する」

と書いてあった。その説明から、「レコード」の意味を正確に知りたくなり、今度は〈Google翻訳〉で「レコード」と入力したところ、「記録」という対訳が出てきた。さらに、次の(16)を読み、多義的な外来語「ソフト」を含む「音楽ソフト」をここでの意味の「音楽CD」ではなく、「パソコンのアプリケーションソフト」のことだと考えた。

(16) 日本レコードセンター(NRC)は音楽ソフトウェアメーカーの共同出資によって設立された共同物流の運営会社である。
(経営学・論文番号4)

そこから最終的に、「日本レコードセンター」はパソコンに関係がある会社であるという解釈にいたる。

ちなみに、「ソフト」について、『岩波国語辞典 第7版 新版』(2011)の語釈は次の(17)のとおりである。語釈は適宜、割愛して示す。

(17) **ソフト**:①やわらかいこと、②「ソフト帽」「ソフトフェア」などの略。
ソフトウェア(コンピューターを働かせるためのプログラム)、**ソフトクリーム**(やわらかいアイスクリーム)、**ソフトドリンク**(アルコール分を含まない飲料)、**ソフト帽**(フェルトなどで作った、やわらかい中折帽子)、**ソフトボール**(大型のやわらかいボール。それを使った野球に似た競技)

ここでは、「ソフト帽」や「ソフトウェア」などいくつかの単語が同じ「ソフト」として記載されることから、「ソフト」は多義的だとわかる。また、この論文での意味である「市販の音楽CD」の用法は、「ソフト」「ソフトウェア」いずれの語釈にもなく、「音楽ソフト」という単語を知らないかぎり理解できない。

また、学習者は「レコード」がいわゆるレコード盤、音盤を指すことを知らないため、音楽ソフトとレコード盤とを結びつけられない。「日本レコードセンター」は論文中での出現回数が3回、その省略形「NRC」は16回で、両者を合わせると19回もある。キーワードである名詞の意味の解釈を誤ることは、論文全体の理解に支障をきたす。

上述のように、カタカナ語の多義性は読解の困難点となりやすいと考えられる。次の4.4もカタカナ語に関する誤読だが、多義性に由来するものではなく、音形の類似による点で4.3とは異なる。

4.4 音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える

学習者はカタカナ表記の未知語の意味を推測するとき、音形の類似から別の語と取り違えて理解することがある。

次の(18)では、カタカナ語の「ホノルルマラソン」という名詞を実際に発音し、その音形の類似から、「ホノルル」は「whole (全部)」のことだと考える。このように取り違えた結果、「ホノルルマラソン」は「フルマラソン」のことだという解釈にいたる。

(18) 日ごろのジョギングの先にある「非日常」としてのホノルルマラソンやニューヨークマラソンへの参加、[……]。(観光学・論文番号11)

ほかに、「コンベンション (convention)」（観光学・論文番号11)を「コンビネーション (combination)」と捉え、「コンベンション事業」を「連携事業」と解釈し、また、「サプライチェーン」(経営学・論文番号7)を「メインではなく、サブのチェーン」と解釈するのも同様の例である。学習者は音形を手がかりに未知語の意味を推測しようと試みるが失敗に終わることが多い。

4.5 漢語の略語の意味を誤って解釈する

学習者は漢語の略語を見ても、略語と捉えず、意味を推測するとき、漢字の知識や周辺の単語との共起関係を参照して、誤って理解することがある。

次の(19)では、「民間放送」の略語である「民放」を、漢字の知識から「民間の人に向けた放送」と解釈する。

(19) 民放によるインターネットビジネスに関する報告は別の機会に譲り、本論文では「テレビ局一視聴者間関係」に関する分析、考察に絞る。(社会学・論文番号8)

また、次の(20)は「大手企業」の略語である「大手」に「に」がついた語句を副詞として誤読し、「積極的に」と解釈する例である。

(20) 運賃改定により格安航空券が正規化され、新興勢力だったHISが大手に価格競争を挑み台頭した。(観光学・論文番号11)

学習者は「大手企業」の意味は知っていたが、この例の「大手」がその略語とは考えない。そこで、「大手」の意味を推測するのに、周辺の単語との共起関係を参照したところ、「積極的に価格競争を挑む」という一連の表現が文章でよく使用されることを思い出し、「大手に」は「積極的に」という意味の副詞であると考えた。その解釈の結果、意味だけでなく、品詞も誤ってしまう。

学習者にとって、ある単語が略語かそうでないかを判断する手がかりは乏しく、略語の知識がないかぎり正しく理解することは難しい。

4.6 照応関係が把握できない

次の(21)は、「パッケージ」という単語が先行文脈と照応関係にあることがわからず、自分がよく知っている意味に理解する例である。(21)で指示詞(—線部)とその後要素(□部)、先行文脈(……線部)をそれぞれ示す。

(21) いま一つの特徴は、小売店からの発注、在庫引当て、出荷、配送、荷受確認、請求までの一連の業務を、システム化していることである。この□一貫したシステムの利用によって、小売店とメーカー双方が業務プロセスを効率化するというメリットを提供している。[……] これほど幅広い業務プロセスを事業領域に持つことから、NRCは自社の経営コンセプトを「小売店、メーカー、消費者を信頼でつなぐ□パッケージ物流サービスの提供者」と表現している。(経営学・論文番号4)

(21)を分析すると、1文目の“小売店からの発注、在庫引当て、出荷、配送、荷受確認、請求までの一連の業務”は、2文目で“この一貫したシステム”という指示語句で捉え直され、さらに3文目で“これほど幅広い業務プロセス”

と名づけられ、最終的に“パッケージ物流サービス”という複合名詞で言い換えられている。

高崎（1988）によると、名づけとは前の叙述を指示語句で捉え直すとき、後要素に臨時一語をつくり、それによって前の叙述を名づけるもので、「書き手の把握の個性の打ち出された、新しいものの見方の指示」であるという。（21）の例で「パッケージ物流サービス」の「パッケージ」は「一括する」という意味で、この複合名詞は1文目の「小売店からの発注、在庫引当て、出荷、配送、荷受確認、請求までの一連の業務」という先行文脈を言い換えた語として照換関係にある。しかし、学習者はそれに気づかず、よく知っている意味から、（22）のように「包装する物流サービス」と解釈する。

（22）NRCは自社の経営コンセプトを「小売店、メーカー、消費者を信頼でつなぐ包装する物流サービスの提供者」と表現している。

前の叙述が別の語で捉え直されて文章が展開していくのを正確に読み解くのが読解の適切な手順だが、これは上級学習者にも難しい作業のようだ。

以上、名詞の意味を誤って理解する例について、6類型に分けて述べてきた。次の4.7では誤った推測から正しい理解に落ち着く例を取り上げる。

4.7 誤った推測から正しい理解に落ち着く

学習者は未知語の意味を推測する場合、誤った推測から出発しても正しい理解に落ち着くこともある。

次の（23）では、「右肩上がり」を「軍人は右肩に勲章をつけている」という背景知識を使って、「非常にいい発展をする」と解釈する。推測の方法は誤っていたものの、たまたま結果的に正しい理解に落ち着く。

（23）[……] 旅行産業は急激な右肩上がりとなって成長した。

（観光学・論文番号11）

学習者は様々な知識やストラテジーを使って未知語の意味を推測する。しかし、誤った推測が必ずしも誤った理解にいたるとは限らない。

次の5ではこれまでの知見を考察し、読解力をつける方法を論じる。

5 読解力をつけるために

本研究では、上級学習者は様々な要因から名詞の意味を誤って理解することがわかった。学習者に辞書的な語彙力があっても、それがなかなか読解力に結びつかない。辞書には多くの場合、意味が複数列挙されているが、そこから文脈に合う意味を瞬時に選ぶのは決してやさしくはない。

宮谷（2005）によると「読む」のに必要なのは、単語や文の情報から選択可能な意味を頭の中にリストアップし、用法の範囲を絞り込み、他の可能性を排除する能力である。また、村木（2002）が述べるように、個々の単語の意味は文という構造の中で、はじめてある特定の意味を持ち、多義的な語の意味は文の中で一義化されて特定される。

では、読解力をつけるためには今後どのようなことを読解教育に取り入れればよいだろうか。それについて5.1から5.3で述べる。

5.1 辞書や翻訳アプリなどのリソースの特性と使い方

経営学論文（論文番号4）を読んだ学習者が使用した翻訳アプリ〈Google翻訳〉は単語の対訳が1つしか出ず例文もないため、対訳が文脈に合わなくても気づきにくい。学習者にとって例文の出る辞書やアプリの使用は必須である。

さらに、学習者の多くは単語の意味の調べ方を体系的に教わった経験に乏しく、独自の方法で調べる傾向がある。そのため、辞書や翻訳アプリの特性を理解しないまま使い、誤った検索結果に終わることもある。最近では翻訳アプリなど新しいリソースも増えている。現状では学習者に任せっきりとなっている辞書などの調べ方を教育すべきである。具体的には、同じ単語を調べても、辞書やアプリ、ウェブサイトによって検索結果が異なること、様々なリソースを組み合わせて補完しあって検索することの重要性、専門用語の辞書の有効性を実感させることである。

5.2 固有名詞か普通名詞かを判別する方法

学習者が固有名詞か普通名詞かを判別することに困難をおぼえることについて付言しよう。学習者は会社名や人名などの固有名詞を固有名詞と考えず、普通名詞と捉える。こうして辞書を引き、その語釈に従い、「プラネット物流」という物流会社名を「地球全体が繋がるようなシステムを持つ物流」と解釈するように、原著者が意図しない意味を付加して理解することはすでに述べた。

固有名詞か普通名詞かを判別する手がかりは述語情報に注目することである。以下、経営学論文（論文番号4）の例で説明する。“阿保は、日用品業界の共同物流を運営する「プラネット物流」を題材に深い考察を行っている”という文において、「運営する」という述語相当の機能を持つ修飾要素の統語情報を使えば、「プラネット物流」が共同物流を運営する主体であることがわかり、そこから会社名と推測できるはずである。また“[……] 国領は [……] と説明している。彼はプラットフォームを [……] と定義している”という文章において、「説明する」「定義する」という述語の意味的な情報を使えば、主体は人であると推測できる。統語情報だけでは名詞の意味が特定できない場合、述語や述語相当の語句の意味的特性を積極的に利用しつつ、前後文脈との関係を検討し、固有名詞か普通名詞かを判別する意識を活性化させることが重要である。

5.3 多義的なカタカナ語（外来語）の意味を特定する方法

近年、多義的なカタカナ語が増加している。同じカタカナ語でも分野によって意味がまったく異なっていることも多い。このことが文中における名詞の意味の特定を困難にする。

たとえば、経営学の論文（論文番号8）に出てくる「プラットフォーム」の意味を辞書で調べると、「駅のプラットフォーム」「コンピューターを動かすためのOSやハードウェアなどの基本的な環境」という記載はあるが、この論文での意味である「共同物流の共同インフラ」は一般的な辞書には載っておらず、専門用語辞典にあたる必要がある。

多義的なカタカナ語を解釈する場合、文脈に合うように意味を特定したり、別の可能性を考えたりする必要がある。その習慣を身につけるには、たとえば

次のような練習問題が有効だろう。

- (24) IT業界のA社が開発したソフトは今年売上を伸ばした。
ソフトの意味は (a.ソフトウェア b.ソフトボール c.やわらかい)

中山（2008）は日本語教育では「カタカナ語」はついでにしか教えられていないことが問題だと言う。専門的な学術論文ではカタカナ語が頻出するため、読解困難に陥りやすい。多義性を持ち、頻度の高い専門用語のカタカナ語を意識した教育が必要である。

6 まとめと今後の課題

本稿では、学習者が学術論文を読むときの、名詞の意味の誤った理解に焦点をあて、その誤読について考察し、次の①から⑥について述べた。①固有名詞を普通名詞と取り違える、②複合名詞の全体の意味が合成できない、③多義的なカタカナ語で文脈に合わない意味を選ぶ、④音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える、⑤漢語の略語の意味を誤って解釈する、⑥照応関係が把握できない、である。

現代日本語において新語は外来語、固有名詞、複合名詞の形で増え続けるが、これらはいずれも今回学習者が誤った理解をしたものである。しかし、これらの教育は従来重視されておらず、習得は学習者に委ねられてきた。また、読むときのリソースとなる辞書などの使い方も学習者に任せっきりとなっている現状は改めなければならない。

日本語の語彙を全体として眺めた時に、将来的には漢語が減り、代わって外来語が増加するという見方がある（樺島2004）、特に専門分野の新しい概念を取り入れる必要がある学術論文においてはその傾向は顕著であると言えよう。このような日本語の現状を考えると日本語教育における外来語の扱いは、現状に見合った改訂が求められる。教師は、学習者が外来語を習得できるように授業でこれまで以上の時間を割くだけでなく、学習すべき外来語を効果的に選択する視点も持ち合わせる必要があるだろう。

最後に今後の課題を述べる。名詞は分野ごとに多様なため、教師が教育現場で外来語の多義性について解説を加えることが欠かせない。そして固有名詞の判別には、述語または述語相当の機能を持つ語句の統語情報や意味的特性を徹底して利用することを学習者に意識づける必要がある。これ以外に有効な手段はなさそうである。 〈国立国語研究所〉

謝辞

本稿の執筆にあたり、桜美林大学大学院の青山文啓先生には貴重なご指摘とご助言をいただいた。また、久留米大学の永利貴子先生には中国語についてご意見をいただいた。本研究は科学研究費補助金基礎研究（B）23320107「実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究」（研究代表者：野田尚史）の支援を受けた。記して感謝を申し上げる。

参考文献

- 石井正彦（2006）「複合語はなぜ字面以上の意味を表すのか」『國文學 解釈と教材の研究』51(4), pp.56-59.
- 樺島忠夫（2004）『日本語探検—過去から未来へ』角川書店
- 高崎みどり（1988）「文章展開における“指示語句”の機能」『国文学 言語と文芸』103, pp.67-88.
- 館岡洋子（1996）「文章構造の違いが読解に及ぼす影響—英語母語話者による日本語評論文の読解」『日本語教育』88, pp.74-90.
- 谷口すみ子（1991）「思考過程を出し合う読解授業—学習者ストラテジーの観察」『日本語教育』75, pp.37-50.
- 中山恵利子（2008）「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」『日本語教育』138, pp.83-91.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（2011）『岩波国語辞典 第7版新版』岩波書店
- 野田尚史（2014）「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』16(1), pp.9-14.
- 深尾百合子（1994）「工学系の専門読解教育における日本語教育の役割」『日本語教育』82, pp.1-12.
- 宮谷敦美（2005）「読むための日本語教育文法」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.167-185. くろしお出版
- 村木新次郎（2002）「第3章 意味の体系」北原保雄（監修）・斎藤倫明（編）『朝倉日本語講座4 語彙・意味』pp.54-78. 朝倉書店
- 山本一枝（1995）「科学技術者のための専門文献読解指導」『日本語教育』86, pp.190-203.